

石垣市 ICT 活用基本方針「I - プラン」



自立した学習者の育成を目指して



GIGA×「自立した学び」×「資質・能力」で学びが変わる

『 I - プラン 』

・ 石垣市の「I」 ・ ICT の「I」 ・ わたしの「I」

・ 出会い ・ 学び合い ・ つながり合い



令和7年3月改訂

 石垣市教育委員会

目次

はじめに	1
教育の不易流行	
5つのコンセプト	
1 基本的な考え方	
（1）ICTを活用した目指す姿	3
（2）目指す授業	4
2 学びにおけるICTの活用	
（1）従来の授業×端末活用の授業	6
（2）クラウド活用の授業	8
（3）「教える場面」と「学びとる場面」を意図的・計画的にデザインする	9
（4）「見方・考え方」を働かせる場面における活用	10
（5）デジタルの良さを生かす	12
（6）学習指導要領における情報活用能力	13
（7）家庭学習におけるICT機器の活用について	14
（8）ICTを活用した多様な支援	15
（9）端末持ち帰り（常時）に向けた取り組み	
3 学校へのサポートについて	16
（1）教員の校務の効率化	
（2）ICT活用能力の向上	
（3）教職員向けWebサイトの開設	
（4）学校ICT支援員の配置	
（5）1人1台端末の整備とヘルプデスク設置	
4 情報モラル教育について	
5 スケジュール	17
6 教育DXに係る方向性（目標値）	
（1）ICT活用促進ルーブリック	18
（2）教育DXに係るKPIの方向性	
おわりに	21
資料	22

はじめに

社会の変化が激しい予測困難な現代において、少子高齢化、人口減少に伴う労働生産の低下、地球規模課題等、VUCA※と表現される時代の中にあります。また、生成 AI※等をはじめとする技術革新が一層進展し、社会や生活を大きく変えていく Society 5.0 の時代へと近づいていることも実感できます。まさに、世の中の在り方や社会システムが急速に変わってきています。

本市では、すべての児童生徒の GIGA 端末の整備と学校における高速ネットワーク環境を構築し、ICT を活用した取り組みの推進を図ると同時に、各学校においても、これまで蓄積されてきた教育実践をもとに新しい ICT 環境における学びを組み合わせ、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した「新しい授業のかたち」を進めております。

子供たちが、変化の激しい予測困難な未来の中で「生きる力」を身につけるためには、ICT を活用した教育実践は不可欠であり、児童生徒の学びのさらなる充実が重要になります。併せて、これからの時代においても変わることのない、教育の「不易」とそれらの普遍的な使命を実現するためにも、社会や時代の「流行」を取り入れるという捉えをここで再確認します。

本市の取り組みが3年目のフェーズを終えると同時に、新たな局面を迎え、「教え込む授業」から「学びとる授業」へのシフトチェンジをしながら、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、学校、家庭・地域、行政との連携がますます重要となります。

この基本方針は本市のすべての学校において ICT を活用する教育を確実に進めていくために再考を重ね、改訂版として策定しました。ICT を活用した取り組みの羅針盤としてご活用いただき、教育における「不易の徹底」と「流行の活用」を十分に見極めつつ、教職員をはじめすべての大人が子供たちの未来を見据えて、日々の教育活動に取り組んでいくことを確認します。

※VUCA

「Volatility：変動性」、「Uncertainty：不確実性」、「Complexity：複雑性」

「Ambiguity：曖昧性」の4つの単語の頭文字をとった造語。



「文部科学省 教育振興基本計画リーフレットPI イラストを引用」

※生成 AI

Artificial Intelligence の略。コンピュータで、記憶・推論・判断・学習等、人間の知的機能を代行できるようにモデル化されたソフトウェア・システム。

教育の不易流行

「不易」

教育基本法の理念、目的、目標、機会均等の実現を目指すことは、これからの時代においても変わることのない教育の「不易」

羅針盤



バランスを重視

「流行」

「不易」としての普遍的な使命を実現するためにも、社会や時代の変化に柔軟に対応し「流行」を取り入れることが必要

- ◆ 「不易」を実現するために「流行」を取り入れるという「教育の不易流行」の捉え
- ◆ 知・徳・体を一体で育む「**日本型学校教育**」の良さを継承しつつ、ツールとしての **ICT** を基盤とし、**学びを充実**させていく

5つのコンセプト

1

自己を調整

児童生徒が自らの学習状況を把握し、自己調整しながら学ぶ

2

資質・能力を自覚

児童生徒が身につけた資質・能力を実感して学ぶ

3

見方・考え方を働かせる

児童生徒が「見方・考え方」を働かせて学ぶ

4

単元をデザインする

児童生徒が「教えてもらう」と「学びとる」のバランスの中で学ぶ

5

基盤となる ICT 活用

児童生徒がクラウドを最大限に活用して学び、教師は学習状況を見取る

併せて確認すること

- ◆ 児童生徒の将来を見据え「自立（自律）」することを念頭に取り組む
- ◆ 「資質・能力の3本柱」及び「学習の基盤となる資質・能力」の確実な育成を目指す
- ◆ 多様な他者と協働して主体的に課題を解決する学びの場を提供する
- ◆ 様々な体験活動や地域資源を活用した学びの場を提供する
- ◆ これまでの実践を継承しつつ、新たな GIGA 環境を最大限に活用する

I 基本的な考え方

(1) ICT を活用した教育の目指す姿 「教え込む授業」から「学びとる授業へ」

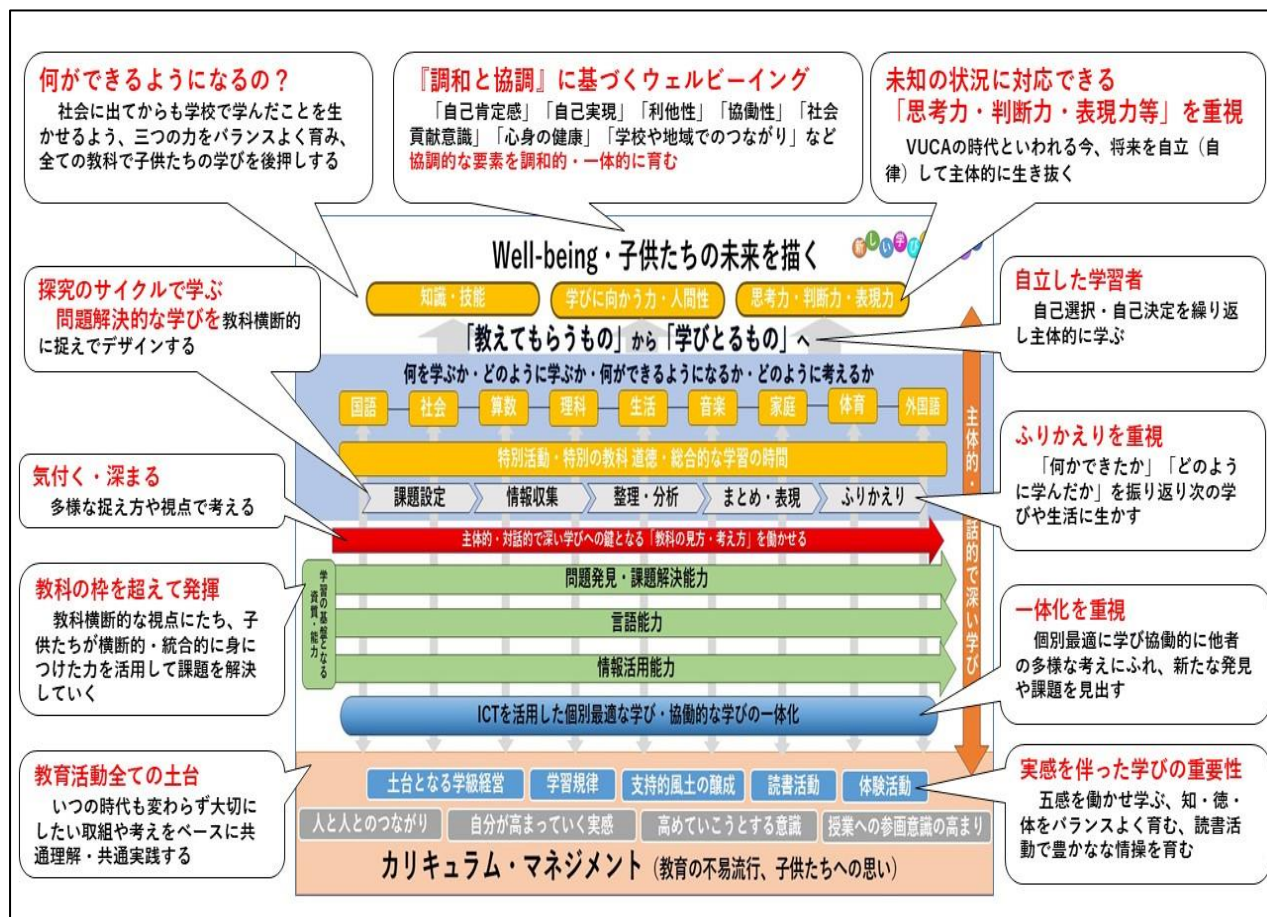
令和3年4月に中央教育審議会より示された「令和の日本型学校教育の構築を目指して」（答申）と本県の『「自立した学習者」育成プロジェクト』に基づき、これまでの実践を継承しつつ、「**自立した学習者の育成**」を目指し、取り組んでいきます。

本市においては、これまでと同様に**教科書を教育活動の中心的な教材**とし、ICTも様々な学習場面で活用するとともに、クラウドを効果的に活かし、「**個別最適な学び**」「**協働的な学び**」を**一体的に充実**させ、「**主体的・対話的で深い学び**」の**実現に向けた授業改善**を通して、下記の通り「自ら考え 計画を立て 判断し 行動する」自立した児童生徒の育成を「I-プラン」の目標とします。

〈目標〉

「自ら考え 計画を立て 判断し 行動する」自立した児童生徒の育成

◆ 目指す姿のイメージ① 【全体像】



(2) 目指す授業

① 個別最適な学び

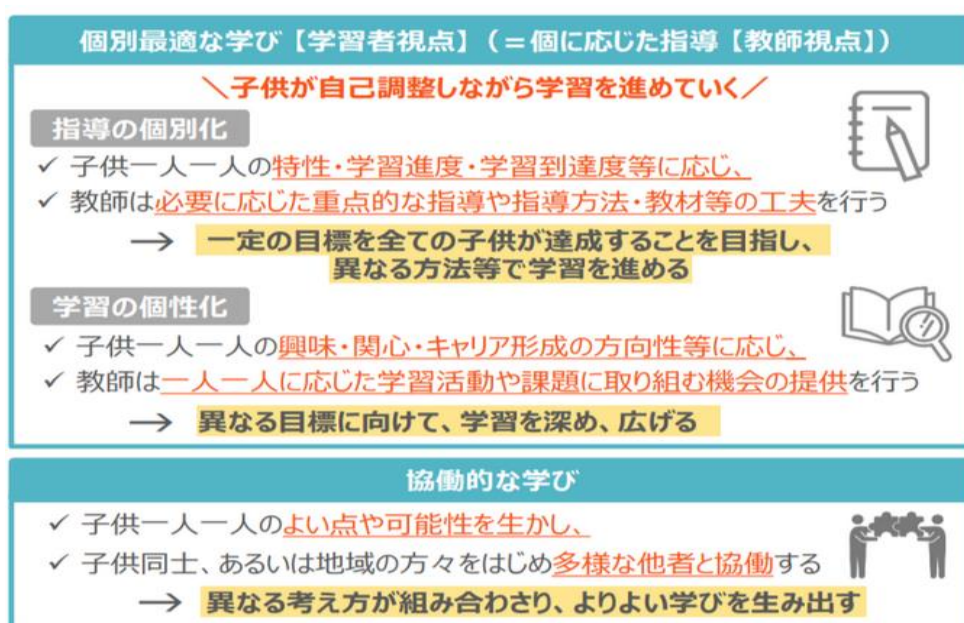
子供たちの個性や個人差などの多様な教育的ニーズにきめ細かく対応し、可能性を引き出す授業を目指します。そのためには、「個に応じた指導」を充実させることが重要です。「個に応じた指導」をより具体的に示した「指導の個別化」※「学習の個性化」※の充実を図り、子供の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、**子供が自ら学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう**に促していきます。

② 協働的な学び※

「協働的な学び」は、同一学年・学級はもとより、異学年間の学びや他の学校の子供との学び合いなども含みます。**知・徳・体を一体で育む「日本型学校教育」のよさを生かし**、学校行事や児童会（生徒会）活動等を含め学校における様々な活動の中で充実を図っていくことが大切です。

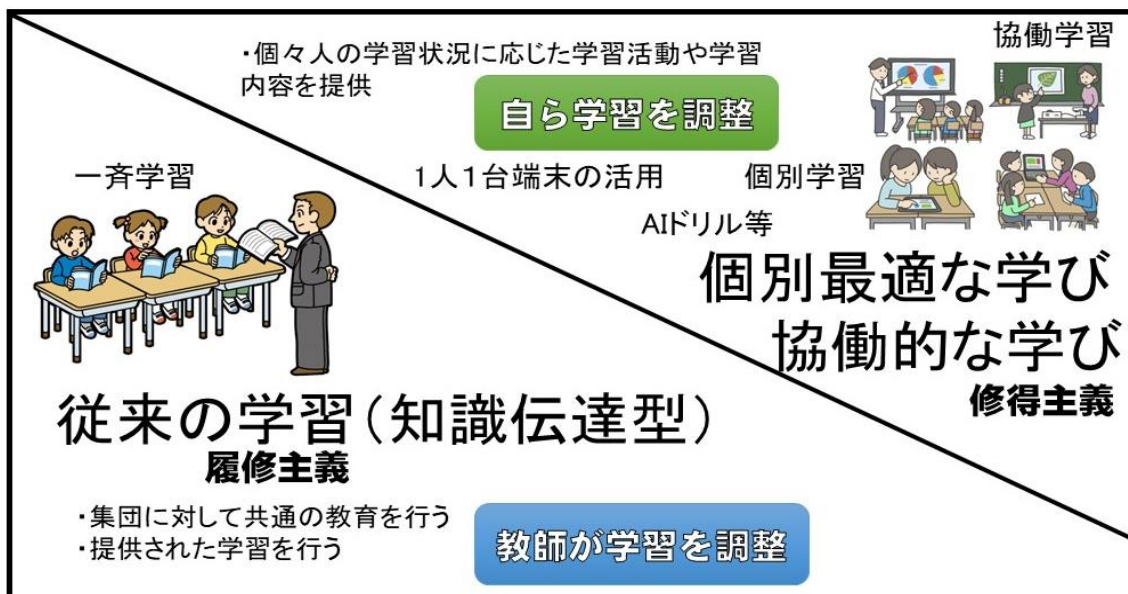
また、「協働的な学び」では、**集団の中で孤立してしまう**ことがないように、異なる考え方が組み合わさり、よりよい学びを生み出していくようにすることが大切です。お互いの感性や考え方等に触れ刺激し合うことの重要性について改めて認識し、教師と子供、子供同士の関わり合いの中で**人間関係づくりや地域社会や自然環境の中での体験活動等**を充実させ、様々な場面における協働的な学びが子供たちの未来に必要不可欠です。

※指導の個別化と学習の個性化、協働的な学び



「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（答申）【総論解説】P3から抜粋

◆ 目指す姿のイメージ② 【一斉学習との組み合わせ】



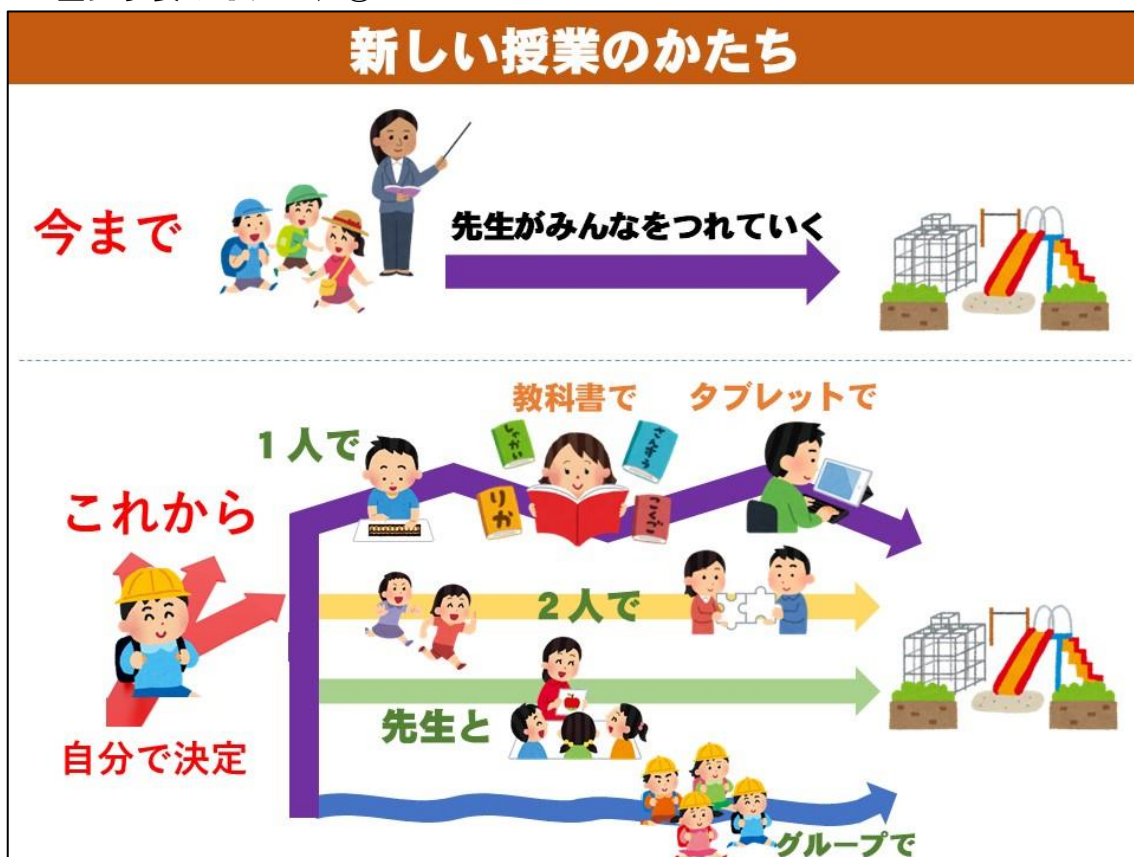
小学校低学年

小学校高学年

中学生

学年の実態や学習内容に応じて、**適切に一斉学習を組み合わせながら**取り組むことが重要です。

◆ 目指す姿のイメージ③ 【個別最適な学びと協働的な学び】



2 学びにおける ICT の活用

ICT の活用により、時間や距離に関わりなく、いつでも、どこでもデータの蓄積や送受信ができ（時間的・空間的制約を越えること）、教師と子供だけでなく、子供同士の意見交流の活性化（クラウドを活用した他者参照や共同編集等）多様な情報を収集、整理・分析し、自分の考えをまとめ・表現すること（情報活用能力が身につく）が容易であることなどが特徴です。このような特徴を踏まえ、**学習方法や学習形態を適切に組み合わせる**ことで効果的な指導が期待できます。

- ◆ 一人の教師が多数の児童生徒に対して授業を行う【一斉学習】
- ◆ 一人ひとりの能力や特性に応じた学び【個別学習】
- ◆ 子供たち同士が教え合い学び合う協働的な学び【協働学習】

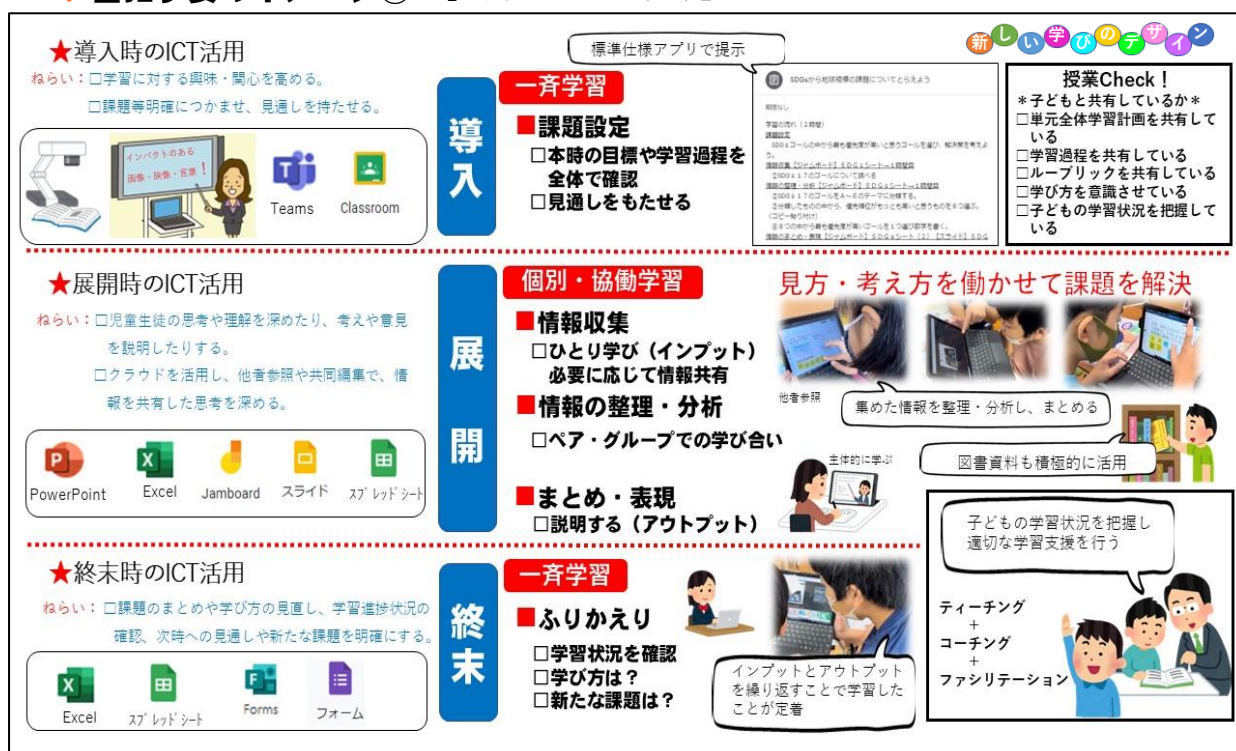
(1) 従来の授業×端末活用の授業

一斉学習や個別学習・協働学習を相互に組み合わせ、ICT を効果的に活用します。各学習場面における活用のポイントは以下のとおりです。

一 斉 学 習	【教材の提示による視覚的に分かりやすい授業】 ・電子黒板や実物投影機で、資料や画像・動画などを拡大したり書き込んだりしながら提示することで、視覚的に分かりやすく伝えることができる。 ※校内で実物投影機の設置の仕方（場所や活用方法）を揃える（推奨） ・学習課題や学習手順、資料や動画等を提示し、学習の見通しを持たせ、主体的な学習ができる。 ・デジタル教科書等を併用し、デジタル教材等により理解を深めることができる。 ・オンラインによる集会、一斉学習が可能。
個 別 学 習	【個に応じた学習（個別最適化学習）】 ・AI 型ドリルや学習アプリ等を活用し、一人一人の習熟の程度に応じた学習が可能。 ・学習履歴や学習評価を分析することで、児童生徒の未定着な分野を抽出し、個に応じた課題を重点的に学習することができる。 【主体的・対話的な調べ学習・調査活動】 ・教科書を基本の教材とし、インターネットやデジタル教材等も活用して、調べたい情報を収集、整理・分析、まとめ・表現しながら、多様な考えに触れ他者の意見を認めながら、新たな気づきが生まれる。（情報活用能力・探究のサイクル） ・標準仕様アプリを活用し、考えや意見の集約・共有、アンケート調査等が可能。 ・編集アプリ等を活用し、情報を収集し、整理分析したことを編集しデータとして共有することができる。また、作品等の成果物を通した活発な意見交流が行える。

協働学習	【発表や活発な意見交流】 ・学習課題に対する自分の考えを、標準仕様アプリ等を活用して他者と考えを共有しながら学習を進めることができる。(他者参照・共同編集) ・1人1台端末で編集した資料や意見などを、電子黒板に提示し、全体で共有することで活発な意見交流がうまれる。 【空間を越えた学習】 ・学校内での異学年との交流及び他校や他県とのオンラインによる交流学習が可能。 ・さまざまな業種、専門家等との交流、意見交換が可能になり、キャリア教育の充実が図れる。
------	---

◆ 目指す姿のイメージ④ 【授業の流れ（例）】 ※スタンダードではない



※**単元全体を見直し**、適切に板書やノートを使うこと

※**学年等の実態に応じた**指導や学習形態を計画すること

※**探究のサイクルの学習過程で教科横断的に学ぶ**ことができる

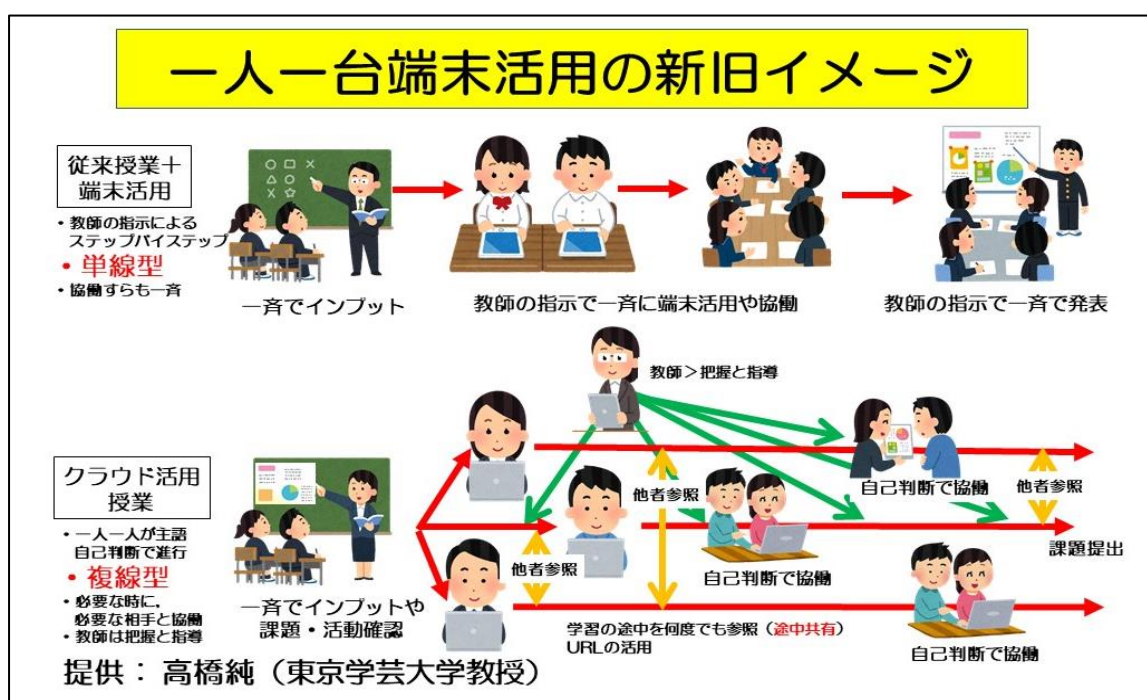
(2) クラウド活用の授業

従来の一斉授業における端末活用の授業では、主に教師の指示や説明、発問等により学習が進んでいきます。クラウド活用の授業では、提示された学習内容を基に、学習課題の解決に向けて、各自の方法で学習を進め、必要な時に必要な相手と協働で学んでいきます。クラウドを活用することで、たくさんの**考えを共有**できたり、**協働で編集**したりできます。また、教師は、**子供たちの学習の理解度や進捗状況を把握し、子供一人一人に適切な支援及び指導**をするなど、ティーチングからコーチング、ファシリテーターのような役割と変わります。

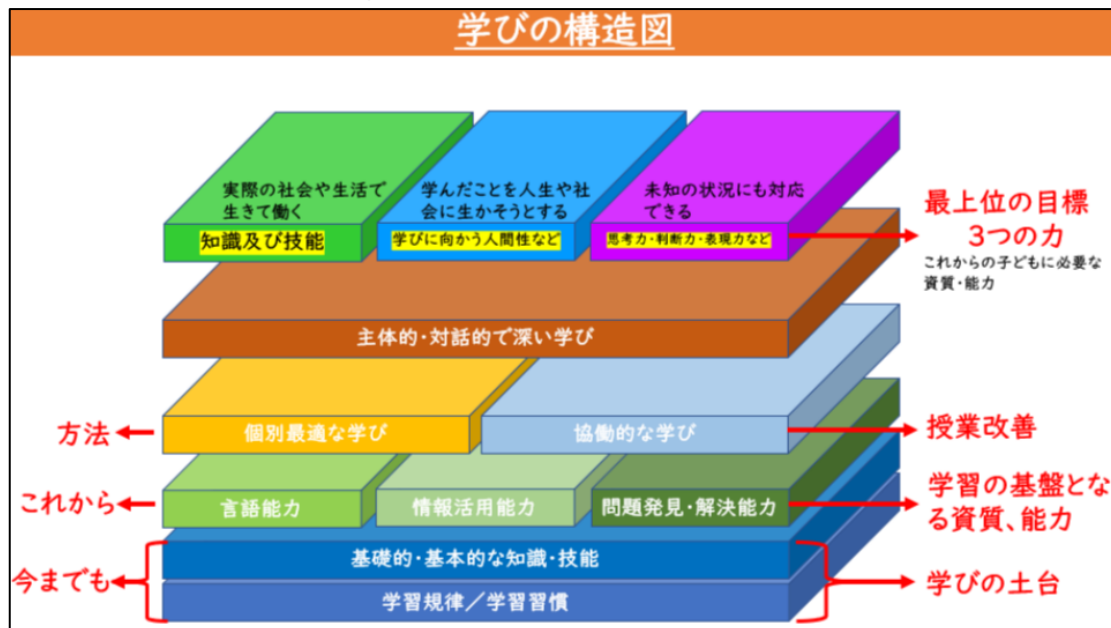
今後は、従来の授業を基に、単線型と複線型を相互に組み合わせた授業を展開するとともに、さらには、クラウドを最大限に活用した複線型の授業を子供の実態に応じて行うことで、主体的な学習や自己調整力の育成が期待できます。ただし、学年の実態に応じて取り組む必要があります。

具体的には、**小学校低学年から中学年では、一斉指導を基本として、基礎となる学習規律や学習の仕方、発表や学び合いの仕方等を身に付けさせることが大切です**。また、お互いのことを尊重し合える支持的風土づくりや安心・安全にすごせる学級づくり等、**学級経営がカギ**となります。これらを土台として、中学年から高学年、中学校へと学年が上がるにつれ、**グラデーションのように徐々に子供にゆだねる場面を増やしていく**ことで、本市の目指す自立（自律）した学習者の育成を目指します。

◆ 目指す姿のイメージ④ 【クラウド活用の複線型】



◆ 目指す姿のイメージ⑤ 【資質・能力ベースの授業づくり】



これまでも育んできた学習規律や学習習慣等を土台に「**学びに向かう人間性**」「**知識・技能**」「**思考力・判断力・表現力等**」及び「**問題発見・課題解決能力**」「**言語能力**」「**情報活用能力**」等の資質・能力を身につけることを意識してカリキュラム・マネジメントすることがポイントとなります。

(3)「教える場面」と「学びとる場面」を意図的・計画的にデザインする

子供たちが自律して学習することを念頭に置くことは大切ですが、「**ゆだねる**」ことを優先すると子供だけでは、**学びが深まらない状況が生まれることも懸念**されます。

学習状況等を踏まえ、教師は積極的に子供の学びに介入し、ファシリテートしたり、一斉指導をしたりすることも必要になります。

単元計画をデザインする際には、「一斉学習・個別学習・協働学習」、「教師が決めて取り組ませる」「子供が学習課題や学習方法等を選択して学ぶ」等、単元計画を意図的・計画的にデザインすることが重要です。

「教師が」教える（一斉型）・「子供が」学びとる（ゆだねる）								
	パターン1	パターン2	パターン3	パターン4	パターン5	パターン6	パターン7	パターン8
学習課題	子供が	子供が	子供が	子供が	教師が	教師が	教師が	教師が
学習方法	子供が	子供が	教師が	教師が	子供が	子供が	教師が	教師が
学習形態	子供が	教師が	子供が	教師が	子供が	教師が	子供が	教師が

【単元デザイン】【カリキュラム・マネジメント】が重要

※パターン1～8は優劣をつけるものではない。

※教師が示したり教えたりする・**子供が自己選択及び自己決定して学びとっていく**ことを意図的・計画的に設計する。

※自立した学習者の育成を念頭に置きながら、育成する資質・能力を踏まえつつ、単元計画や学習過程に位置付ける。

※一斉学習と個別最適・協働的な学びのそれぞれの良さを踏まえ、計画していく。

◆ 目指す姿のイメージ⑦ 【グラデーションのように】

段 階	ポイント	基本的なICT活用（例）
小学校 1・2年	☐ 一斉学習でしっかり教える。 ☐ 学習のルールをていねいに理解させ、定着を図る。 ☐ 文字や図、写真等を使って説明や発表ができる。 ※1年生のGIGA端末使用開始は5月中旬～6月上旬頃推奨	・アプリにログインできる。 ・写真が撮れ、保存できる。
小学校 3・4年	☐ 一斉学習を基本とし、しっかり教える。 ☐ ペアやグループ学習で、自分の意見を言える。 ☐ 教科書から情報を集めることができる。 ☐ 集めた情報を分類や比較することができる。 ☐ 文字や図、写真等を使って発表スライドを作成できる。 ☐ 整理・分析した情報をまとめ、説明したり発表したりできる。	・タッチタイピング（1分間に20字程度） ・Formアンケートに回答できる。 ・標準仕様アプリが使える。
小学校 5・6年	☐ 課題を解決するための主体的な学習ができる。 ☐ 教科の特性に応じて探究のサイクルで教科横断的に学ぶ。 ☐ 教科書やインターネットから情報を集めることができる。 ☐ 集めた情報を分類・比較・関連付けるなど整理・分析ができる。 ☐ 目的に応じて、分かりやすく発表スライドを作成できる。 ☐ 整理・分析した情報をまとめ、分かりやすく説明したり発表したりできる。 ☐ Web上の写真や動画などの情報から課題解決に必要な情報を集め、整理・分析しまとめることができる。	・タッチタイピング（1分間に40字程度） ・チャットを正しく使い、情報交換ができる。 ・データ保存ができる。
中学校	☐ 自ら課題を設定し、解決するための主体的な学習ができる。 ☐ 小学校で身に付けた資質・能力を土台として発展的に学ぶ。	・タッチタイピング（1分間に60字程度）の文字入力ができる。 ・種類や内容に応じて、適切なデータ保存ができる。

(4) 「見方・考え方」を働かせる

子供たちが「**どのように学ぶか**」「**何を学んだか**」「**どのように考えるか**」という**学びの質を重視**した「**主体的・対話的で深い学び**」の視点からの授業改善が求められています。

「深い学び」の鍵とされているのが「見方・考え方」です。子供たちは、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現という学びの過程において、「見方・考え方」を発揮し、各教科等で習得した知識・技能を活用したり、思考力を働かせたりしながら、「深い学び」に向かいます。

子供たちが「見方・考え方」を働かせるように、教師が**意図的・計画的に単元の学習計画を立てる**ことが大切です。ICTを効果的に活用することで、より多くの考えを共有したり参照したりし、見方・考え方を働かせながら課題解決することで、学びをさらに深めることができます。

なお、総合的な学習の時間における「**考える技法**」についても同様に働かせながら課題解決や言語能力の育成を図ることも重要です。

※〈資料1～3〉参照

〈資料 1〉

見方・考え方の捉え

 見 方	物事を捉える視点
 考え方	思考の進め方や方向性

各教科等の解説において示している**各教科等の特質に応じた「見方・考え方」**を踏まえながら、学習内容に応じて柔軟に考えることが重要です。

〈資料 2〉

考える技法

※中学校も同様

参考：小学校学習指導要領 総合的な学習の時間編P85

比較する	複数の対象について、ある視点から 共通点 や 相違点 を明らかにする。
分類する	複数の対象について、ある視点から 共通点のあるもの同士 をまとめる。
順序付ける	複数の対象について、ある視点や条件に沿って対象を 並び替える 。
関連付ける	複数の対象がどのような 関係 にあるかを見つける。関係するものを増やしていく。
多面的・多角的に見る	対象のもつ複数の 性質に着目 したり、対象を異なる 複数の角度 から捉えたりする。
理由付ける (原因や根拠を見つける)	対象の 理由や原因 、 根拠 を見つけたり予想したりする。
見通す(予想する)	見通し を立てる。結果を 予想 する。
具体化する (個別化する、分解する)	規則に当てはまる 具体例 を挙げたり、対象を 構成 する上位概念や下位概念や要素に分ける。
抽象化する (一般化する、統合する)	法則 を挙げたり、 対象を1つにまとめたり する。
構造化する	考えを 構造的に整理 する。

〈資料 3〉

児童生徒が「見方・考え方」働かせるための発問や手立て等

授業

改善

「見方・考え方」を働かせるような発問(問い)や資料、場面や活動を設定する

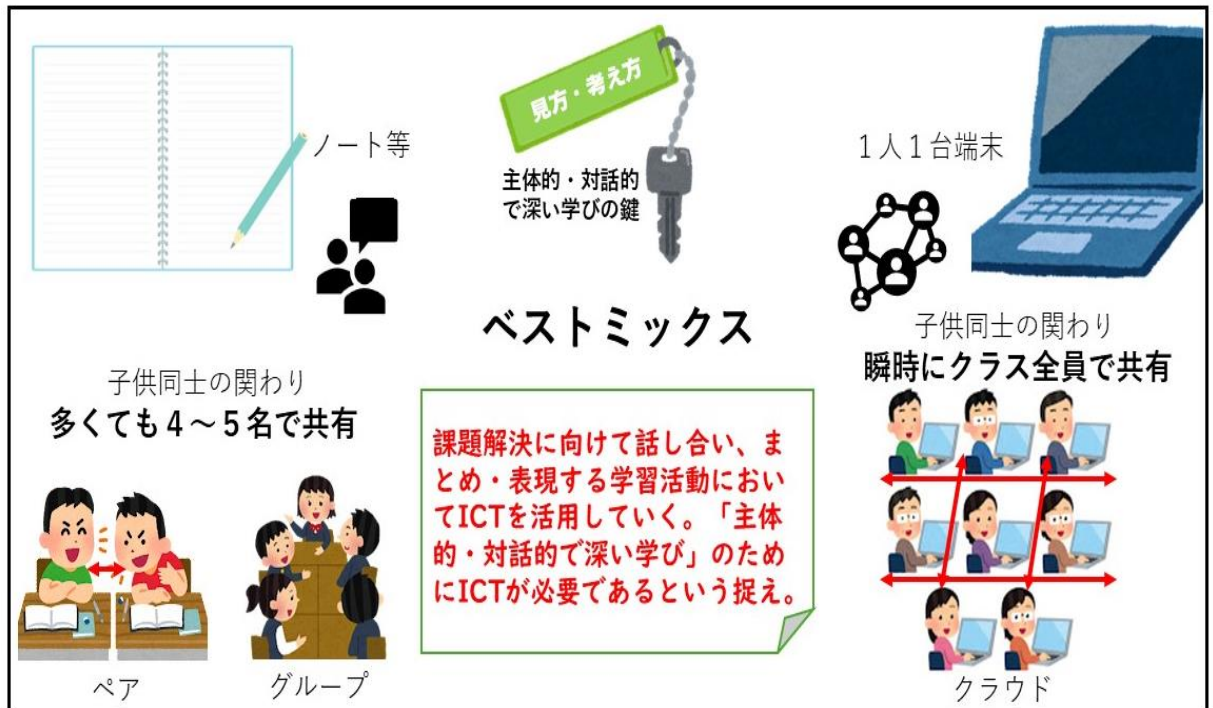
- ・教師が着目させる具体的な視点を示す(写真等の資料提示の場面)
- ・資料提示の仕方を工夫する(提示する順番、構成の異なる資料等)
- ・文章中の言葉に着目させた発問をする
- ・児童生徒の多様な考え方(求め方)を想定しながら単元をデザインする
- ・共通点や相違点に着目させる発問をする
- ・既習の内容を想起させ予想(仮説)させる
- ・生活経験と関連付けた発問をする
- ・児童生徒自身の思いや願いが膨らむような導入を工夫する
- ・比較する場面を設定する
- ・ある構成や要素に着目させる(色・形・大きさ・におい・味等の五感)
- ・材料に触れ、手を動かしながら考える場面を設定する(具体物・半具体物)
- ・「どうして?」「どのように?」「なぜ?」など課題設定のアプローチを工夫する
- ・児童生徒同士の違う考え方に着目させる(相違点から導く)
- ・児童生徒同士の認め合う場面を引き出す
- ・言葉で表現するための時間を確保する(言語化・言語活動)

子供たちが「見方・考え方」を働かせていることを自覚させるために、価値づけるなど働きかけが重要です

(5) デジタルの良さを生かす

アナログとデジタルが二項対立にならず、**どちらも場面に応じてより効果的に活用していく**ことが大切です。ICT 機器やアプリケーション、クラウド等を含めたデジタルだからこそできることを最大限に生かすことで、新しい授業のかたちの実現が加速します。

◆ 目指す姿のイメージ⑧ 【他者参照が可能】



小学校低学年

小学校高学年

中学生

◆ 目指す姿のイメージ⑨ 【デジタルのメリット】

ICT (GIGA 端末) 活用のメリット

メリット1: 速く書ける (入力)、多く書ける (圧倒的な出力量)

メリット2: 消しやすい (手直しがすぐできる)

メリット3: 着目しやすい (文字の大きさ、色、動かせる)

メリット4: 残しやすい (データ保存、ふりかえりがしやすい、比べやすい)

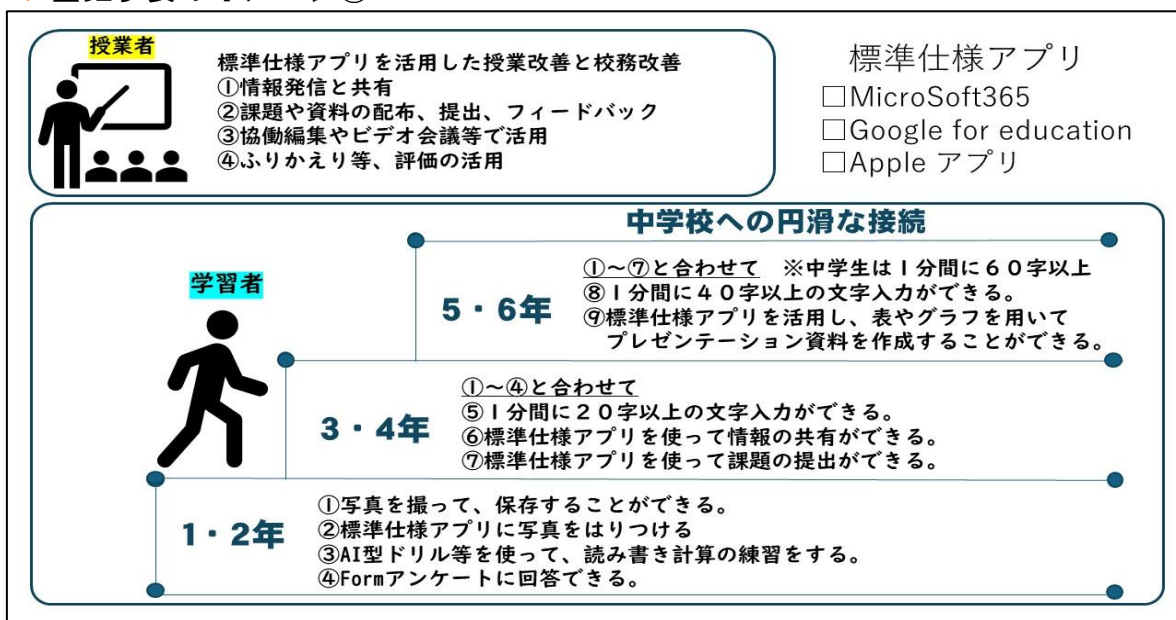
メリット5: 共有しやすい (連動できる・共同できる・多くの資料)

(6) 学習指導要領における情報活用能力

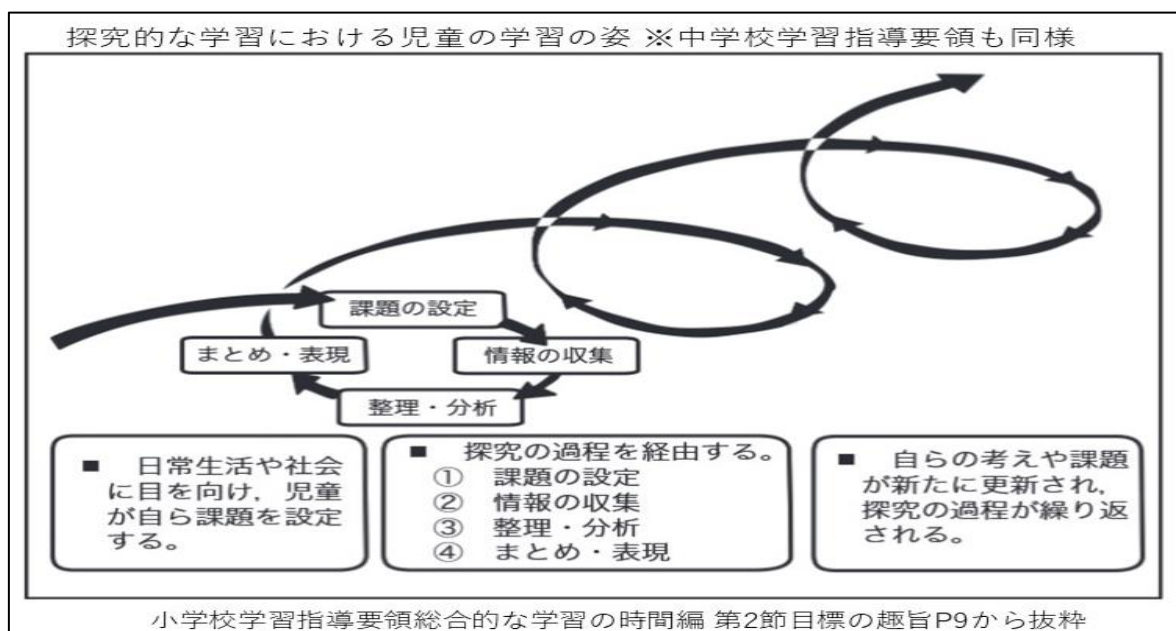
「学習活動において必要に応じてコンピュータ等の情報手段を適切に用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報を分かりやすく発信・伝達したり、必要に応じて保存・共有したりする力であり、さらに、このような学習活動を遂行する上で必要となる情報手段の基本的な操作の習得や、プログラミング的思考、情報モラル、情報セキュリティ、統計等に関する資質・能力等も含むものである」とされています。

各教科等の学習内容を相互の関係でとらえ、教科横断的な視点で内容を整理したり、先進事例等の資料等を参考にしたりして、情報活用能力の育成を図っていくことが大切です。

◆ 目指す姿のイメージ⑩ 【基本的操作スキル】



◆ 目指す姿のイメージ⑪ 【探究のサイクル】



(7)家庭学習における ICT の活用について

児童生徒1人1台の端末の配備と、ICT環境を整備したことで「オンラインによる双方向授業」や「オンデマンドによる動画配信」など、各教科の特性に応じた活用が可能になりました。

今後は、**児童生徒が自ら計画を立てて学習**したり、**授業と連動した学習**に取り組んだりする等、家庭学習の充実を図ることが重要です。

家庭学習例
【家庭学習における児童生徒1人1台の端末利用】 ・端末を持ち帰り、AI型ドリルや動画、デジタル教材などを用いて、授業の予習復習を個のペースで取り組める。 ・臨時休業等においても、学習機会が途切れることなく、学習の保障ができる。(オンライン型授業、オンデマンド視聴など) ・端末の持ち帰りによる、学習課題への取り組みと、提出、採点が素早く行える。 ・オフライン対応の学習アプリの導入 【ポータルサイトの活用】 ・学習ポータルサイト「I-スタディ」等に、学習教材や活用方法を掲載し、子供や保護者が安全かつ、有効に活用できるようにする。

◆ 目指す姿のイメージ⑫ 【AI型ドリルの効果的活用】

AIドリル			
AI型ドリルで児童・生徒それぞれの学習進度・理解度に応じた問題が提示され、 補填的・発展的な学習 、また 基礎学力の向上を図る ことのできる学習教材			
AIドリル活用場面例 単元をデザインする上で適切な場面で、計画的に活用することで効果UP！			
導入	展開	終末	その他
・学習問題の把握（一斉） ・復習、予習（個別）	・問題の解決（一斉、個別） ・小集団や全体等での考えの交流や練習合い（協働）	・学習のまとめ（一斉） ・到達度確認（一斉） ・レベル別練習問題（個別）	・朝の帯タイム、放課後等の短時間学習 ・宿題や長期休暇の課題
単元学習 児童生徒が自分自身で何を学ぶか選択し、習熟度に応じたドリル問題を反復できる	確認テスト 単元ごとの確認テストをとおして、到達度を確認できる	一斉学習 先生が時間や期間を決めて、一斉に学習するように指示することができる	
ダウンロード学習 ドリル問題と解説教材を、GIGA端末にダウンロードし、オフラインでの学習が可能	成績管理機能 クラスの理解度を確認したり、個人のつまづきを確認できる	多種多様な学習教材 プリント教材やフラッシュカード、アニメーション教材、英会話教材等、学習教材が充実	

授業と家庭学習の両方で活用することで更なる効果が期待できる

(8) ICT を活用した多様な支援

① オンラインシステム等の活用

何らかの理由により教室に行きづらかったり、不登校傾向があったりする児童生徒に対して、オンラインシステム等を利用して在籍学級の授業に参加する等、**ICT を活用したオンライン学習の支援が可能**になります。

② 心の健康観察アプリ等を活用

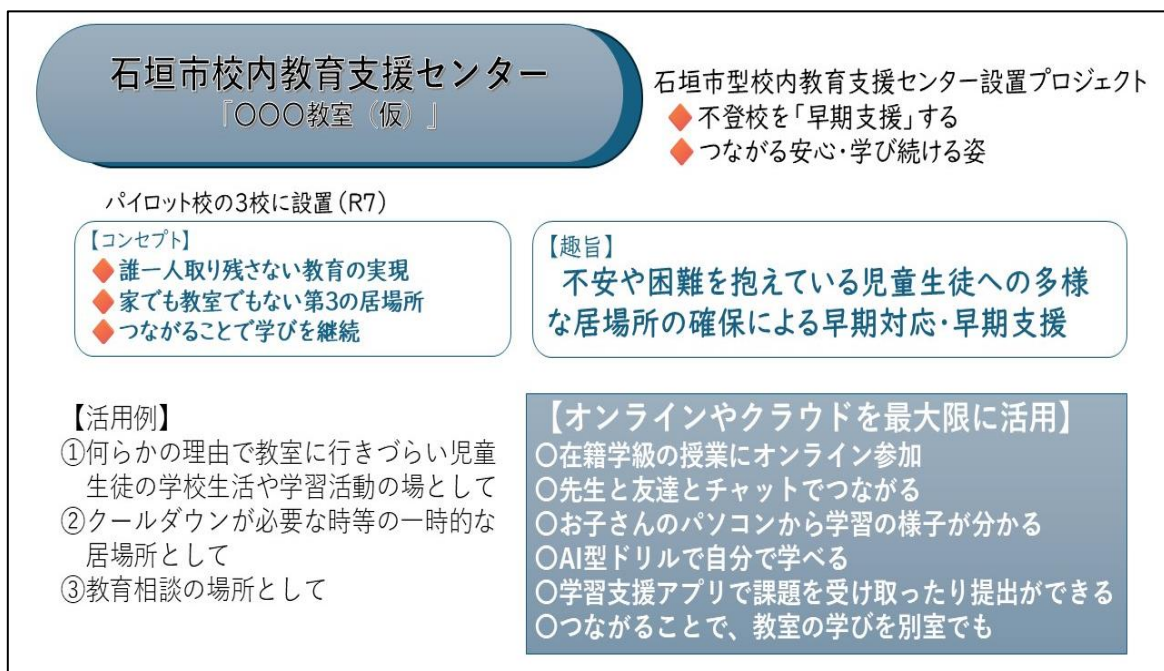
様々な要因により困難を抱える**子供たちの SOS の早期発見・支援**等につなげます。

③ 臨時休業時における対応

④ オンデマンド授業の配信

⑤ 日本語指導が必要な児童生徒への翻訳機能等の活用

◆ 目指す姿のイメージ⑬ 【誰一人取り残さない教育】



(9) 日常的な端末の持ち帰りに向けた取り組み

① 端末の持ち帰りによる利用規定の周知徹底を図ります。

② 端末は「文房具」として常時活用できる状態にします。（意識改革）

③ 児童生徒・保護者向けポータルサイト「I-スタディ」を開設し、情報周知に努めます。

3 学校へのサポートについて

(1) 教員の校務の効率化（負担軽減、子供と向き合う時間の確保）

次世代型校務支援システムや保護者連絡システム、学習支援アプリ等を効果的に活用することで校務のデジタル化を推進し、教職員の業務効率化及び負担軽減を図り、児童生徒一人一人に向き合う時間の確保を目指します。

(2) ICT 活用能力の向上に向け、「教育 DX 研修会」等の研修を実施します。

(3) 教員向けに「授業における ICT 活用アイデア集」や「活用事例」「機器操作基本マニュアル」など、ポータルサイトを開設します。

・石垣市教育委員会教職員向けポータルサイト「I-ポータル」の開設

※「ICT 広場」含む

(4) 学校 ICT 支援員を配置します。

※4 校に 1 人配置（学校の ICT 環境整備 3 か年計画 2025～2027 年度）

・年に 8 回の研修会を実施します。「教育 DX 研修会」

・校内研修やミニ研修等、活用研修に対応します。

・月ごとや要請に応じた支援訪問を計画・実施します。

(5) 1 人 1 台端末の整備とヘルプデスクを設置します。

・端末についての質問や機器の故障、紛失等についての問い合わせに対応できるようヘルプデスクとの連携を行います。

4 情報モラル教育について

情報モラル教育については、教育活動全体を通して行っているところですが、学習端末の整備に伴い、今まで以上に児童生徒がインターネットを活用する機会が増えてきます。そのため、情報モラルの指導や端末機器の適切な管理に加え、ID・パスワード管理の徹底（児童生徒が責任をもって自己管理する意識を持たせること）がさらに必要になります。

【取組例】

(1) 学校全体で「情報モラル教育」の推進を図る

① 子供たちの実態を把握し、年間指導計画の作成、状況に応じて見直す

② 校内研修等において、教職員向けの情報モラル研修を実施する

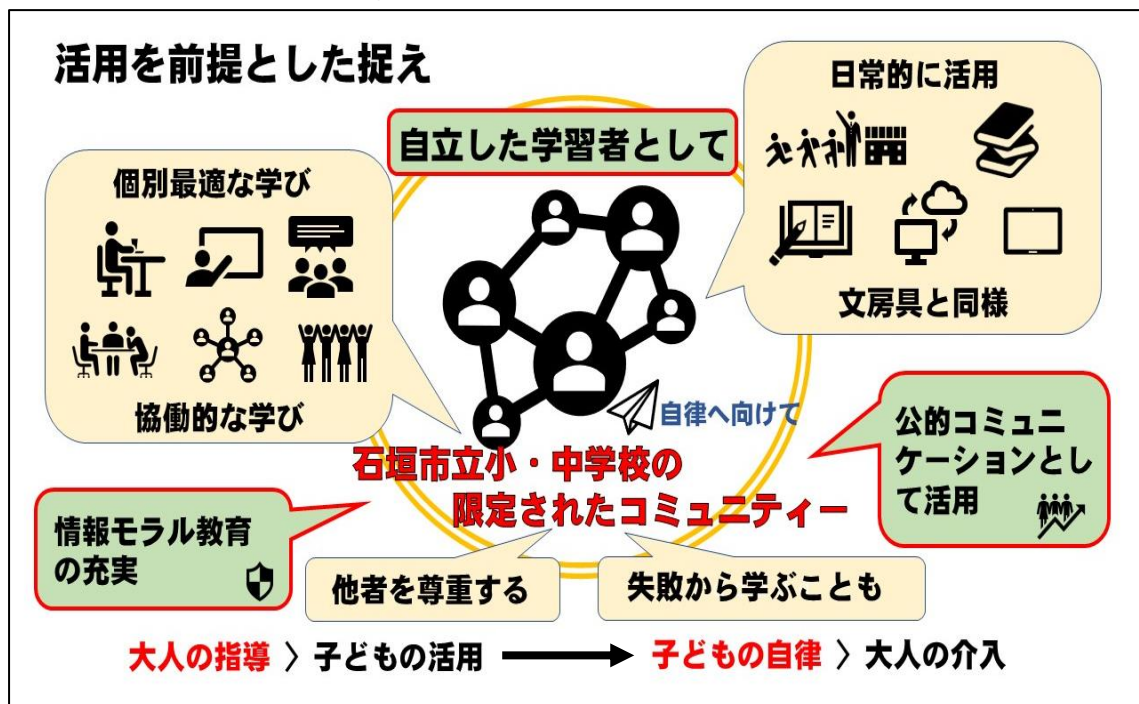
③ 積極的な活用を前提とした取り組みを意識し、ルール作りやモラルについて考える

(2) 家庭における情報モラル意識の高揚を図る

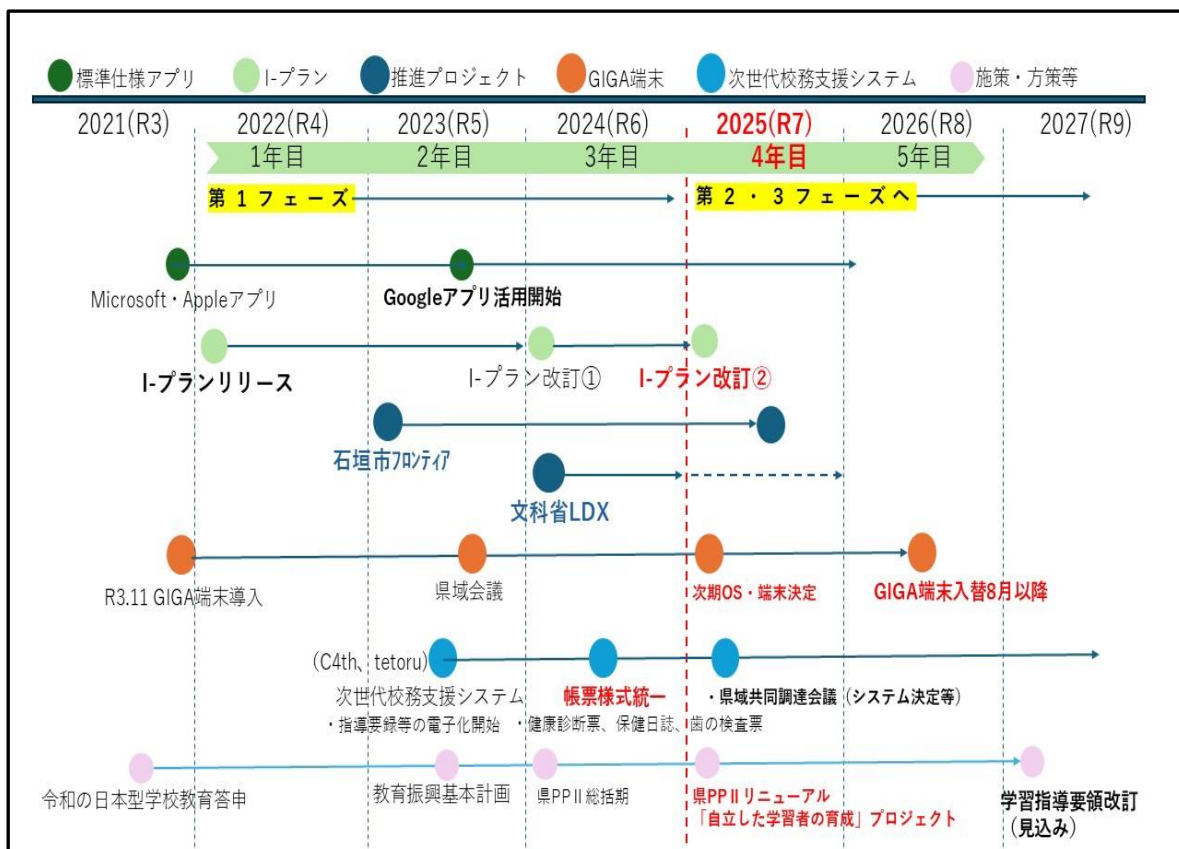
① 家庭向けリーフレット等により、情報モラルに関する啓発を行う

② 保護者向けに情報モラル講話を実施する

◆ 目指す姿のイメージ⑭ 【ポジティブな活用を目指す】



5 スケジュール（これまでの経緯と今後の方向性）



◆ 目指す姿のイメージ⑮ 【フェーズの捉え】



フェーズの移行には、時間を要します。また、ある一定期間においては、様々な課題や問題が発生することが予想されますが、粘り強く取り組むことで、その期間を乗り越え、児童生徒の学びや学校の業務が進化し、新しい発見が期待されます。一つ一つ試行錯誤を繰り返しながら各学校で教育DXの推進をお願いします。

6 教育DXに係る方向性（目標値）

(1) ICT活用促進ルーブリック

ICT活用推進プロジェクト 新ルーブリック（例示）	
取組	段階
	「いつでも(I)」「ちょっと(C)」「つながる(T)」
	〈ステップ1〉 〈ステップ2〉 〈ステップ3〉 〈ステップ4〉
教員同士	○学校では、学習支援ツールなどを活用して、職員同士で情報共有できる環境を構築している。 ○学校では、学校アカウントを用いて、クラウド上に共有フォルダを作成している。（Open777の活用）
効率的な情報共有	○学校では、クラウド上の共有フォルダに、管理職等が中心となって、必要な資料を共有・蓄積している。 ○教員は、学習支援ツールなどを日常的に活用して、職員会議等の資料を共有するなど、ペーパーレス化が進んでいる。
教員と子ども	○教員は、学習支援ツールなどを日常的に活用して、子どもの教材の提示や授業の流れを示すことができる。 ○教員は、学習支援ツールなどを日常的に活用して、学びの振り返りや思考の共有を促すことができる。
学習支援ツールの日常的な活用	○子どもは、提示された教材や授業の流れを基に、単元や授業の見直しをもつことができる。 ○子どもは、学習支援ツールなどを活用して、学びの振り返りや、友達との考えを共有することができる。
子ども同士	○子どもは、1人1台端末を活用して、個別にインターネットで検索したり、写真や動画撮影などで記録を残すなど、必要な情報を収集し、蓄積することができる。 ○子どもは、1人1台端末を活用して、思考ツールなどで情報を整理したり、表計算ソフトなどで分析するなど、収集した情報を整理・分析することができる。
1人1台端末を活用した個別最適な学び	○収集した情報を、子ども同士で共有することができる。 ○子どもは、1人1台端末を活用して、Webアンケート等を活用して、欠席届やアンケートを実施することができる。
学校と家庭	○学校では、保護者に対してWebアンケート等を活用して、欠席届やアンケートを実施することができる。 ○子どもは、家庭においても、学習支援ツールを活用した家庭学習や自学自習を行うことができる。
シームレスな連携	○学校では、Web会議ツールなどを活用して、オンラインで説明会や面談等を行うことができる。 ○子どもは、学校を休んでいる場合でも、Web会議ツールを活用した授業を受けることができる。
日常的なツールの体系表例の作成	○情報活用の手引きにある「情報活用能力の体系表例」を参考に、自校の実態や子どもに付いた力について、確認することができる。 ○「情報活用能力の体系表例」を参考に、各学年ごとに取り組むことを話し合い、学校独自の体系表を作成することができる。

沖縄県教育庁義務教育課「学校におけるICT活用推進に向けて」から抜粋

(2)教育 DX に向けた定量的な KPI※（重要達成度指標または目標値）

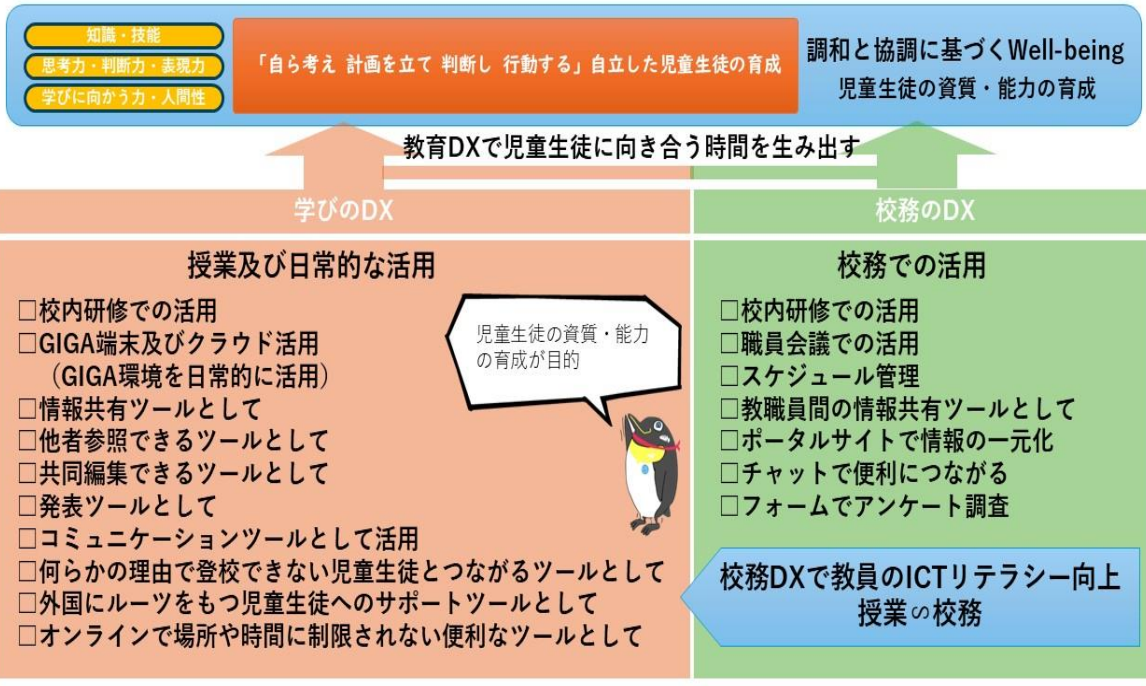
校務DX	☐ クラウド環境を活用した校務 DX を徹底している学校 100%(R8) ☐ FAX でのやり取り・押印を原則廃止した学校 100%(R7) ☐ 生成 AI を校務で活用する学校 50%(R7)
端末の積極的活用	☐ 当該年度に ICT 研修を受講する教員 100%(R7) ☐ 教師の ICT 活用指導力の向上 ①授業に ICT を活用して指導する能力 100%(R7) ②児童生徒の ICT 活用を指導する能力 100%(R7) ☐ 児童生徒が端末を週3回以上活用する小・中学校 100%(R6) ☐ デジタル教科書を実践的に活用している学校 80%(R8)⇒100%(R10)
個別最適・協働的な学び	☐ 以下の場面で端末を週3回以上活用する学校 ①調べる場面 小・中学校 100%(R8) ②発表・表現する場面 小・中学校 80%(R8) ③教職員とやりとりする場面 小・中学校 80%(R8) ④児童生徒同士でやりとりする場面小・中学校 80%(R8) ⑤理解度等に合わせて課題に取り組む場面小・中学校 80%(R8)
情報活用能力の向上	☐ 情報活用の力の底上げとして ①小学校レベル3以下 20%以下(R8) ②中学校レベル5以下 20%以下(R8) ☐ キーボードによる日本語入力スキルの向上（文字/分） ①小学校 40 字（R8） ②中学校 60 字（R8）
学びの保証	☐ 希望する不登校児童生徒への授業配信を実施している学校 100%（R8） ☐ 希望する児童生徒への端末を活用した教育相談を実施している学校 100%（R8） ☐ 日本語指導が必要な児童生徒に対する学習活動等の支援に ICT 端末を活用している学校 100%（R8） ☐ 障害のある児童生徒や病気療養児等、特別な支援を要する児童生徒の実態等に応じて ICT を活用した支援を実施している学校 100%（R8）
働き方改革	☐ 次世代校務システムを導入済の自治体 100%(R11) ☐ 教職員の働き方改革にも資するロケーションフリーでの校務処理を行っている自治体 100%(R11)

文部科学省令和6年2月26日第3回デジタル学習基盤特別委員会資料5-I から抜粋

※KPI とは目標に向かうプロセスの指標であり、数値化することで客観的に可視化できる。

◆ 目指す姿のイメージ⑬

石垣市教育委員会 KPIに向けた教育DXへのアプローチ



教育DXに係るKPI

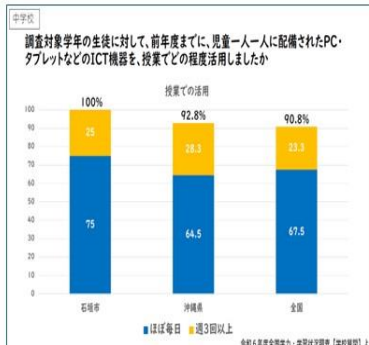
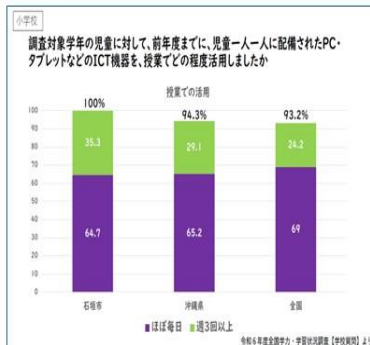
◆ 個別最適・協働的な学びの充実

以下の場面で端末を週3回以上活用する

※学校()は国の目標指数

①調べる場面 (100%)	82.3%・87.5%
②発表・表現する場面 (80%)	70.6%・62.5%
③教職員とやりとりする場面 (80%)	76.5%・75.0%
④児童生徒同士でやりとりする場面 (80%)	64.7%・62.5%
⑤理解度等に合わせて課題に取り組む場面 (80%)	58.8%・75.0%

◆ 端末の日常的な活用 (週3回以上) は100%達成



教育DXに係るKPI

◆ GIGA × 校務DX

- ①クラウド環境を活用した校務DXを徹底している学校 ⇒ (100%) R8
- ②FAXでのやり取り・押印を原則禁止した学校 ⇒ (100%) R7
- ③不合理な手入力を一層した学校 ⇒ (100%) R8
- ④生成AIを校務で活用する学校 ⇒ (100%) R8

教育DXに係るKPI

◆ 情報活用能力の向上

- ①小学校レベル3以下(20%以下)
- ②中学校レベル5以下(20%以下)

◆ キーボード入力

- ①小学校40字以上/分 R8
- ②中学校60字以上/分 R8

おわりに

本方針を策定して、3年が経ちました。各学校における積極的な取り組みにより、日常的な ICT 活用で子供たちの学びも確実に前進しています。変化の激しい時代を迎え、ICT 機器や活用の仕方目まぐるしく変化しており、授業においてもアイデアや方法が日々生まれています。そのような中においては、活用の仕方や授業方法も早いアップデートが必要です。

また、子供たちや保護者にとっても同様に、これからは様々な問題や課題が生じることが予想されます。これらの問題や課題を、子供たちと一緒に考え解決していくことで、きっとよりよい方法がうまれてくることと思います。

子供たちが社会参画する日を踏まえ、私たちが試行錯誤を繰り返しながら模索し、日々の教育活動において、連携して取り組んでいくことが明るい未来につながります。

今後も、学校、家庭・地域、行政が一体となり石垣市 G I G A スクール構想「I-プラン」の取り組みを推進していければと思います。

資料 1

◆ 個別最適・協働的な学びにおける KPI 達成度のエビデンスとなる調査等

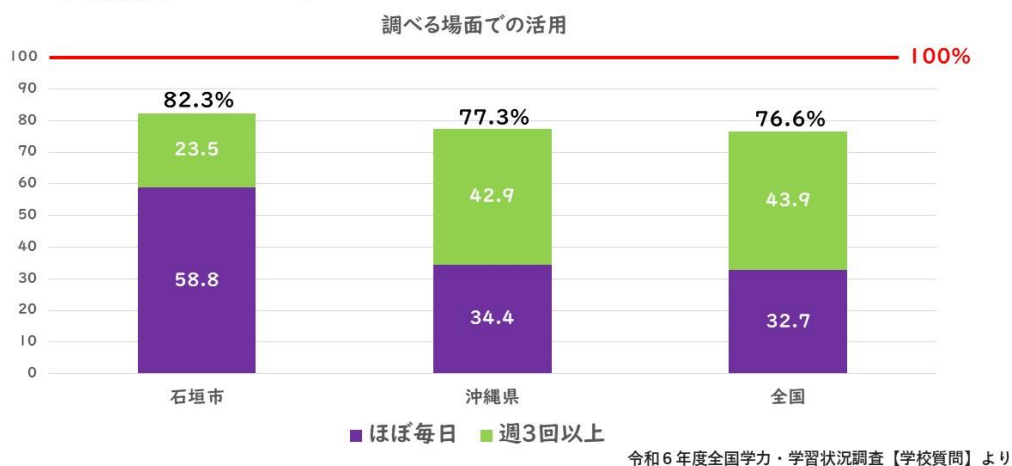
ここでは、「個別最適・協働的な学び」に重点を置くこととし、「教育 DX に係る KPI の方向性」の達成度を確認するための調査やその質問内容については以下の通りとします。

○全国学力学習状況調査 学校質問紙 ※グラフは令和 6 年度の結果

KPI	①調べる場面
質問(57)	調査対象学年の児童生徒が 自分で調べる場面 （ウェブブラウザによるインターネット検索等）では、児童生徒一人一人に配備された PC・タブレットなどの ICT 機器をどの程度使用させていますか。

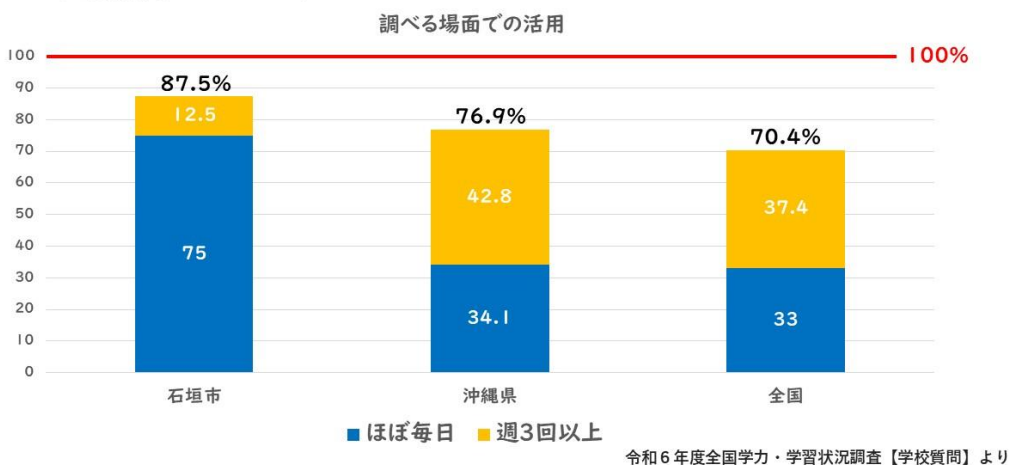
小学校

(57) 調査対象学年の児童が自分で調べる場面（ウェブブラウザによるインターネット検索等）では、児童一人一人に配備された PC・タブレットなどの ICT 機器をどの程度使用させていますか



中学校

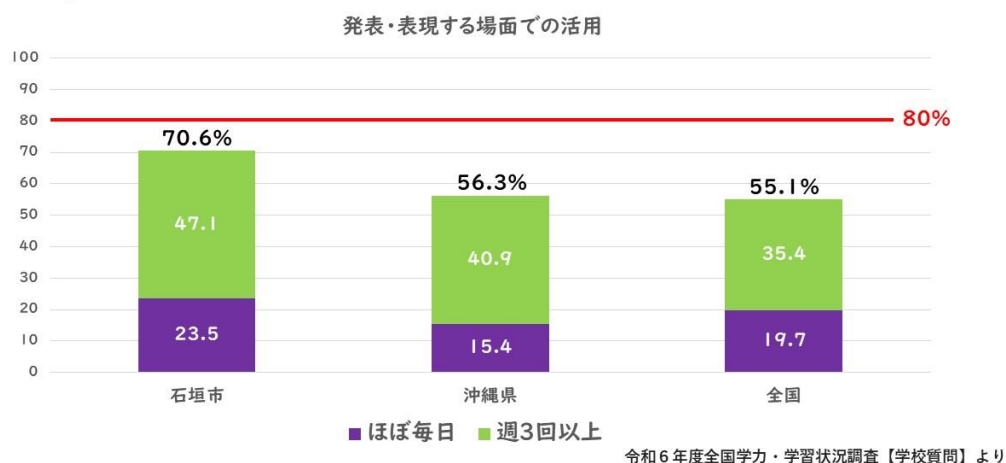
(57) 調査対象学年の生徒が自分で調べる場面（ウェブブラウザによるインターネット検索等）では、児童一人一人に配備された PC・タブレットなどの ICT 機器をどの程度使用させていますか



KPI	②発表・表現する場面
質問(58)	調査対象学年の児童生徒が自分の考えをまとめ、 発表・表現する場面 では、児童生徒一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか。

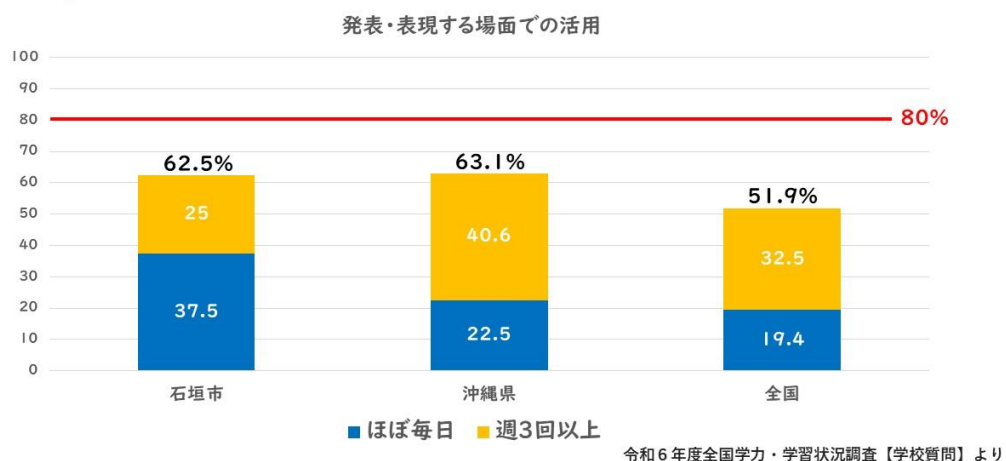
小学校

(58) 調査対象学年の児童が自分の考えをまとめ、発表・表現する場面では、児童一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか



中学校

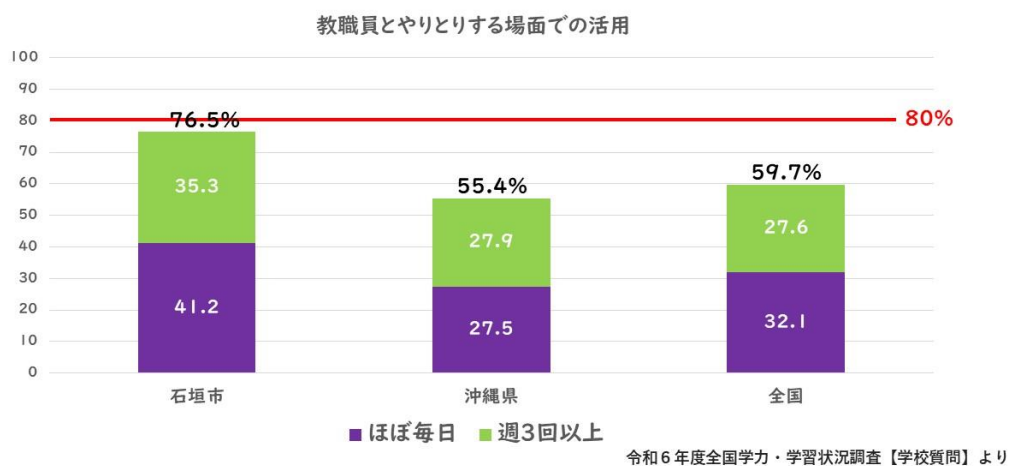
(58) 調査対象学年の生徒が自分の考えをまとめ、発表・表現する場面では、児童一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか



KPI	③教職員とやりとりする場面
質問(59)	教員と調査対象学年の児童生徒がやりとりする場面では、児童生徒一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか。

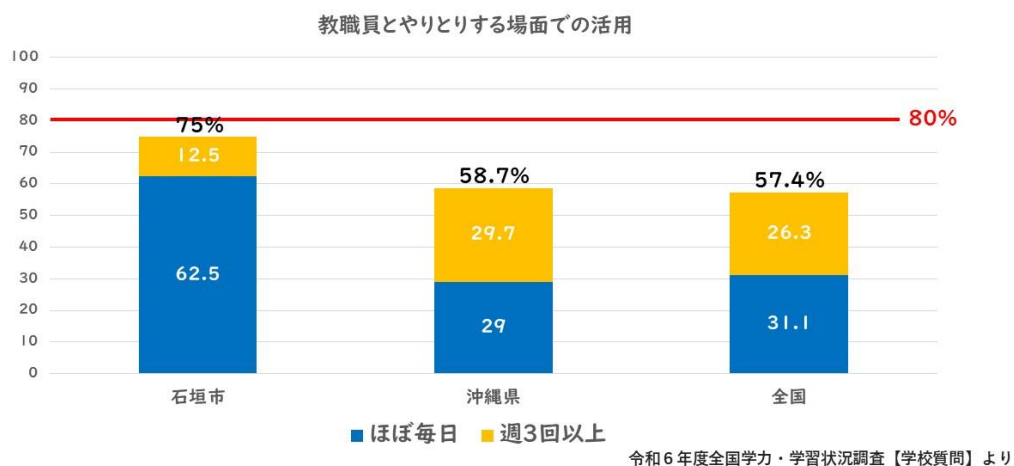
小学校

(59) 教職員と調査対象学年の児童がやりとりする場面では、児童一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか



中学校

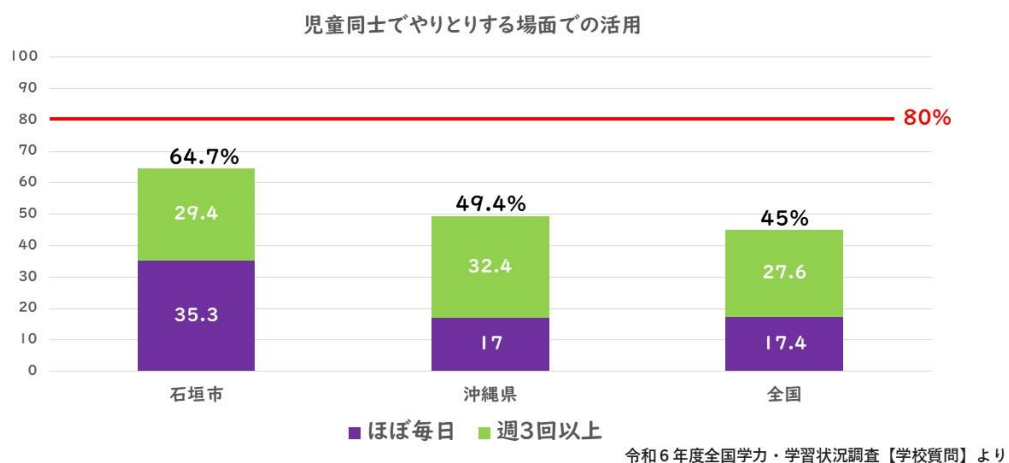
(59) 教職員と調査対象学年の生徒がやりとりする場面では、児童一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか



KPI	④児童生徒同士でやりとりする場面
質問(60)	調査対象学年の 児童生徒同士がやりとりする場面 では、児童生徒一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか。

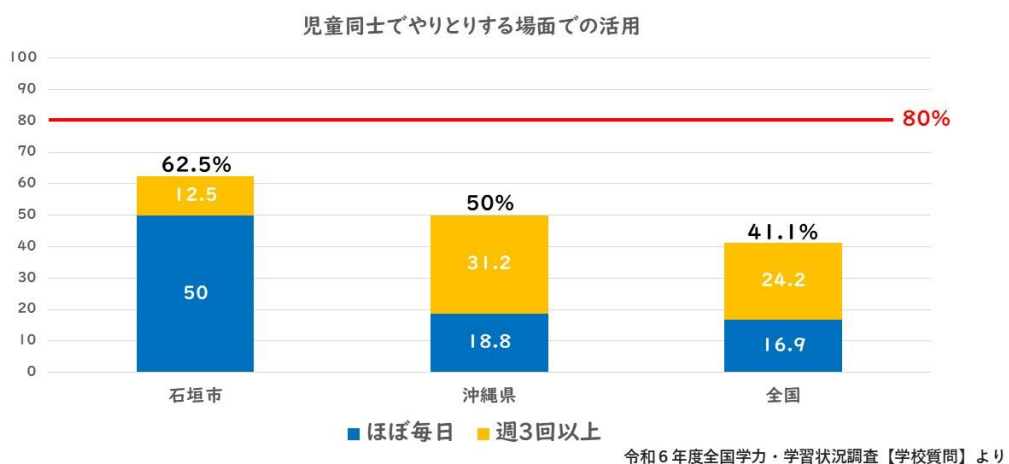
小学校

(60) 調査対象学年の児童同士がやりとりする場面では、児童一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか



中学校

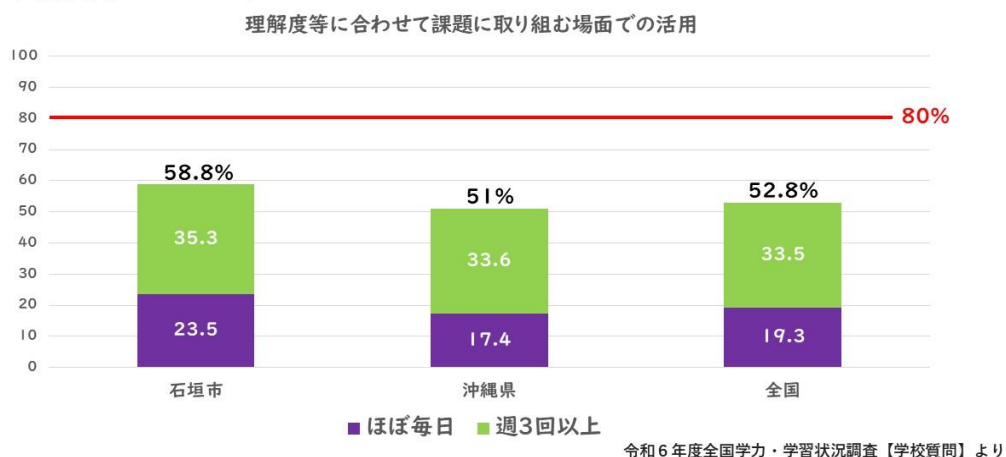
(60) 調査対象学年の生徒同士がやりとりする場面では、児童一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか



KPI	⑤理解度に合わせて課題に取り組む場面
質問(61)	調査対象学年の児童生徒が 自分の特性や理解度・進度に合わせて課題に取り組む場面 では、児童生徒一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか。

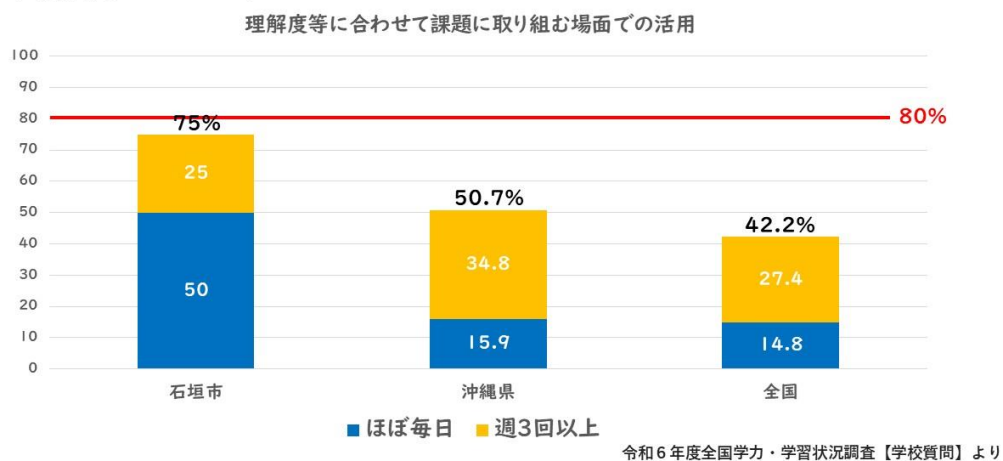
小学校

(61) 調査対象学年の児童が自分の特性や理解度・進度に合わせて課題に取り組む場面では、児童一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか



中学校

(61) 調査対象学年の生徒が自分の特性や理解度・進度に合わせて課題に取り組む場面では、児童一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか



資料 2

主体的な学び	対話的な学び	深い学び
 興味や関心を高める	 互いの考えを比較する	 思考して問い続ける
 見通しを持つ	 多様な情報を収集する	 知識・技能を習得する
 自分と結び付ける	 思考を表現に置き換える	 知識・技能を活用する
 粘り強く取り組む	 多様な手段で説明する	 自分の思いや考えと結び付ける
 振り返って次へつなげる	 先哲の考え方を手掛かりとする	 知識や技能を概念化する
	 共に考えを創り上げる	 自分の考えを形成する
	 協働して課題解決する	 新たなものを創り上げる

引用資料：独立行政法人教職員支援機構次世代教育推進センター